



## ■ショートコメント■

◆若き日のハリソン・フォードが主演した『ブレードランナー』（82年）を私は見ていない。これはフィリップ・K・ディックの小説『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』を原作とし、SFとフィルム・ノワールを融合し、それまで存在しなかったジャンルを確立したものだ。そして、時代の先駆けとなり今なお語り継がれている映画だ。2019年の世界を描くSF大作だった同作のキーワードは「レプリカント（人造人間）」だったが、それから30年を経た2049年には、レプリカントはいかなる進化を・・・？

また、前作の舞台はロサンゼルスだったが、2022年に発生した原因不明の大停電を含めて、ロサンゼルスは、いや地球全体は、30年の間にいかなる変化を・・・？本作は、前作で監督を務めたリドリー・スコットが製作総指揮に回り、新たに壮大な世界を打ち立てたものだが、さてその出来は・・・？

◆『スターウォーズ』シリーズ、『猿の惑星』シリーズ、『エイリアン』シリーズ等々、ハリウッドの超大作シリーズはそれぞれ壮大な世界観に裏付けられたものだから、それを本当に楽しむためにはその理解が不可欠。それに対して、『ブレードランナー』はシリーズではないものの、前作は2019年の未来を描いたものだったし、本作は2049年の未来を描いたもの。

ちなみに、1949年生まれの私は、2019年には70歳の同窓会に出席する予定だが、100年後となる2049年にはこの世にいないはず。したがって、2049年の地球が、そしてロサンゼルスがどうなっているにも私には関わりのないことだが、それなりに興味も……。前作でレプリカントを開発したのはタイレル社だったが、本作冒頭には次の字幕が表示される。

2049年 レプリカントは人間に代わる労働力として、タイレル社が開発した人造人間である。だが、何度も反乱を起こし製造が禁止され、タイレル社は倒産した。

2020年代 生態系が崩壊、企業家ウォレスが台頭し、合成農業によって飢餓を回避した。ウォレスはタイレル社の資産を買い取り、従順な新型レプリカントの製造を開始。旧型で寿命制限のないネクサス8型の残党は“解任”の対象となり追跡された。彼らを追う捜査官の通称は《ブレードランナー》

つまり、2049年にはタイレル社は倒産し、今はウォレス社が新型レプリカントを製造しているわけだ。もっとも、「ブレードランナー」は2049年にも存在しており、本作の主演となるKもそのブレードランナーだが、彼の役割は？そして、本作のストーリーは？

◆中・高校における日本史の勉強では、縄文・弥生時代の学習から始めることもあって、明治維新以降の近代史の学習が不十分であることが指摘されている。近年、時代の変化はますます激しくなっているから、きっと2019年から2049年までの30年間の変化は大きいはずだ。ちなみに、1989年から始まった平成の時代は2018年までの30年間で終わりそうだが、その間の変化も相当なものだった。そこで、本作のプレスシートに記されている年表を示せば後掲の通りだ。なるほど、なるほど。

◆2時間43分という本作の全編にわたって出ずっぱりの主演はK（ライアン・ゴズリング）。Kは本作冒頭、寿命制限のない旧型レプリカントである「ネクサス8型」の残党の“解任”という、LAPD（ロサンゼルス市警察捜査官）通称「ブレードランナー」の任務を果たす導入部を見せてくれるが、これだけで本作の壮大な世界感の一端を感じ取ることができる。この任務達成の報告をする上司はLAPDのジョシ（ロビン・ライト）。また、帰宅したKを待っているのは、孤独なKの相談相手であり、恋人でもあるジョイ（アナ・デアアルマス）。ここらあたりでも2049年という時代の科学技術の進歩の様子をしっかりとつかうことができる。

物語が進行していくのは、Kがウォレス社を訪ね、最新型レプリカントである「ネクサス9型」のラヴと対面するところからだ。ラヴはレプリカントでありながら、ウォレス（ジャレッド・レト）から全権委任されているが、その後の複雑多岐にわたるストーリー展開の中でやがてKと対決していくことになるので、その展開はあなた自身の目でしっかりと。

◆本作の主演はあくまでK。そして、その対決軸に据えられるのが、前述した最新型レプリカントのラヴだ。しかし、中盤のストーリー展開の中では上司ジョシや恋人ジョイを始め、多くの女性陣が登場してくるので、そのそれぞれの役割に注目。そんな女性陣の活躍に比べると、本作ではウォレスを始めとする男性陣の存在感が薄いが、ラストに至って急遽、前作の主人公リック・デッカーード役のハリソン・フォードが登場してくるので、その役割に注目。

## Road to 2049

前作「ブレードランナー」で描かれたのは、2019年の世界。

本作の舞台である2049年までに、いったい何が起きていたのか。

### 2018

異星の植民地におけるネクサス6型の戦闘団による反抗後、レプリカント《人造人間》は地球において死刑に値する違法の存在であると宣告された。

### 2019

試作品のレプリカントであるレイチェルと、危険なレプリカントを取り締まる捜査官《ブレードランナー》リック・デッカーは共にロサンゼルスから逃亡。

### 2020

創設者であるエルドン・タイレル氏の死去後、タイレル社はネクサス8型のレプリカントを流通させるべく開発を急ぐ。4年の寿命しか持たないこれまでのネクサス・モデルとは違い、ネクサス8型は制約のない寿命を持ち、簡単に識別できるように眼球移植をされている。

### 2022: The BlackOut

西海岸で原因不明の大停電が起こる。街は数週間に渡り、閉鎖された。アメリカ国内の電子的なデータはほとんど破損し、破壊された。財政や市場は世界的に停止し、食物の供給は切迫。世の大半がそれを“レプリカントが原因”と非難したことで、社会ではレプリカントの製造を禁止する法令が出されるようになった。

### 2023

統治権力者はレプリカント製造を無期限的に“禁止”する法律を制定。4年の寿命しか持たないネクサス6型モデルは全て退役となる。生き残ったネクサス8型は解任されることとなる。すなわち、彼らは逃亡の可能性がある。

2025

理想主義的な科学者ニアングー・ウォレスは、遺伝子組み換え食物を開発し、その技術が無償で提供、世界的な食糧危機を終焉させた。彼の会社、ウォレス社は世界的に進出——そして異星の植民地へもその力を広げる。

2028

ウォレスは倒産したタイレル社の負債を買い取る。

2030年代

ウォレスはタイレル社の遺伝子工学と記憶移植の方法を強化し、レプリカントを従属的かつ制御可能にするため開発を進める。

2036: Nexus Dawn

禁止法が廃止となる。ウォレスは新型の“完成された”レプリカント——ネクサス9型を発表する。

2040年代初期

LA市警は既存のブレードランナー組織を強化。違法のレプリカントであるネクサス8型を探し出し、解任する役目を負う。

2048: Nowhere to Run

2048年、Bibi's Barの活気ある市場に向くサッパー・モートンはネクサス8型のレプリカントである。枯渇した世界で唯一のタンパク質となる食用の虫を養殖している。彼はトラブルを避け、自分自身に注意を向けられないように訓練している。しかし、その時全てが変わってしまう。

2049

前作から30年後のロサンゼルス。気候変動により海抜が劇的に上がる。巨大な海壁が Sepulveda Pass 沿いに建設され、ロサンゼルスの流域を保護している。ロサンゼルスは以前にも増して居住不可能となり、貧困と病気が蔓延している。異星の植民地への移住ができない不健康な人間たちが取り残されている。新鮮な食物はなく、居住者たちは道端の自動販売機で販売されている、ウォレス社の遺伝子組み換え食物によって生き長らえている。

2017（平成29）年10月16日記